

String
Fiction Series

7

音楽のある生活



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

音楽のある生活

山中與隆

目次

音楽のある生活

1

編者あとがき

62

音楽のある生活

山中與隆

1

わたしが集合時間の五分くらい前に控え室に入つていくと、もうほかの三人は来ていた。まだ誰も音を出していないところをみるとみんな着いたばかりなのだろう。

「おはよう」

と声をかけると、それぞれやりかけていることを続けながら口々に挨拶した。

山下健は、部屋の隅に立てかけてあるパイプ椅子を四重奏の形に並べている。山下由美子は折りたたみ式の譜面台を広げている。ふたりは夫婦である。

岡田淑子は脱いだコートを丁寧にたたんで自分の楽器のうしろに置いたところだ。わたしもすぐに譜面台を広げて、山下健が並べた四つのうちのいちばん

端の椅子の前に置いた。

やがてみんなは楽器を大事そうな手つきでケースからとり出すと、それぞれ勝手に指慣らしを始めた。だれも雑談しない。発表会当日という緊張感がそうさせているのだ。

四人が思い思いの箇所を練習する騒々しい数分が過ぎたころ、わたしはもういいころだと思つて、
「そろそろ、始めますか」

と、だれにももなく声をかけた。勝手な指慣らしの音はすぐにやみ、それまで立ったまま壁に向かつて弾いていた山下由美子と岡田淑子も自分の席に着いた。向かつて左端にファースト・ヴァイオリンの山下健、その右がセカンド・ヴァイオリンの山下由美子、その左側にヴィオラの岡田淑子、そして右端がチェロのわたしである。四人が半円形に弧を描いて並ぶ、弦楽四重奏の一般的なスタイルである。ヴァイオラと

チェロが入れ替わって、ヴィオラがいちばん右端に座るスタイルもあるが、岡田淑子が客に近くなるのは嫌だというので、わが楽団は一度もそのような並び方にしたことはない。

それぞれ楽譜を整え、わたしは演奏の専用の眼鏡をかけた。譜面までの距離、七十センチくらいに焦点を合わせたものだ。山下由美子が慌てた様子で席を立って、自分の楽器ケースから鉛筆を持ってきた。

練習中に申し合わせたことを楽譜に書き込むため、個人レッスンからオーケストラの練習まで、プロ、アマを問わず練習と名のつくところに鉛筆は必需品である。消しゴムもあれば完璧である。書き込むべきことは、練習がすすむとどんどん増えるし、以前書き込んだ内容が変更されることも少なくない。鉛筆は2Bを使う。

「どこからしますの」

と岡田淑子が聞いた。

「第一楽章から」

当たり前のことだという調子で山下健が答える。岡田淑子は自分が担う大切な出番の最初の旋律を弾いてみる。

わたしたちはこの三か月間、今日の合同発表会のために練習してきた。曲は、ヴィオラの有名な旋律で始まるドヴォルジャークの『アメリカ』である。

岡田淑子が練習し始めたのでみんなも第一楽章の
思い思いの部分さらい始めた。しかし、山下健が
ちよつといらいらした様子で弾くのをやめると、

「とにかく指慣らしもかねて、一度通しましょう」
と促した。

結成八年になるこのグループの名前は『カルテツ
ト・ヨハネス』。

この名前は、わたしが大のブラームス好きで、ど

うしてもブラームスの名前を冠したいと主張してつけた。本当は『カルテット・ブラームス』としたかったのだが、現実にはヨーロツパにその名の楽団があり、録音も出しているから、というよりわたし自身がそのCDを持っているのだから、仕方なくヨハネス・ブラームスのファーストネームで妥協したのである。ヨハネスの名を冠したプロの四重奏団があるかどうかは、いまのところわたしは知らないのてこ

れでよしとしている。実はこの名前には、はじめ岡田淑子が反対した。自分たちのような下手くそ楽団がそんなプロミたいな名前を名乗るのは恥ずかしいというのである。わたしが譲らなかつたので、結局この名前になった。

ここで『カルテット・ヨハネス』の四人のメンバーをあらためて紹介しておこう。四人は年令も職業も音楽暦もさまざまである。

まずわたしに近い年令の岡田淑子。彼女は常に精一杯音楽を楽しもうとしている点、アマチュアの正道をいつているといえる。子供のころにヴァイオリンを習ったことがあるが、その後ヴァイオリンから離れていた。大学に入ってから思い出したように、そのオーケストラに入ったが、ヴァイオラが足りないからといわれて、こんどはヴィオラを弾いた。卒業後就職や結婚、育児などでまた中断のあと、五十

過ぎたところに地元の市民オーケストラにヴィオラで入った。それから現在は現在に至るまで熱心に行きつづけている。岡田淑子のご主人は写真に凝っていて、夫婦それぞれ自分の趣味の道を歩いている。ご主人はときどきわれわれが演奏している姿を撮ってくれます。今日も写真機を持って聞きに来ることになっているそうです。アマチュアの演奏会では、プロの場合ほど、演奏中の撮影にうるさくないことが多い。われわれ

も写真だけでなく、幼児の入場にも寛大である。

出来上がった写真を貰っていつも思うことは、その見事なできばえにいかにも立派な演奏をしているように見えるということだ。

山下健と山下由美子は先にもいったように夫婦である。岡田淑子やわたしよりもひとまわり以上若い世代である。ふたりは同じ大学のオーケストラの出身というから、学生時代に見初めあった仲かと思う

が意外にもそうではないのだそうだ。二人は在学時期がずれていて、お互いに大学時代には相手の存在を知らなかった。卒業後、出会いのいきさつと結婚にいたるまでの物語があり、付き合いが始まってから初めて同じオーケストラの先輩後輩であることがわかったという。奇遇である。二人ともアマチュアとしてはかなり弾けるヴァイオリニストである。

ヴァイオリン演奏の技術にはさまざま要素があ

ってどちらが上手いかを単純に言い切ることは難しいのだが、奥さんのほうが旦那さんよりもニュアンス豊かに弾くと、岡田淑子もわたしも思っている。

わたしは、同じヴァイオリンなんだから曲によつてファースト・ヴァイオリンとセカンド・ヴァイオリンを交代したらいいのにと提案したことがあるが、
山下健は

「そんなことしなくていいよ」

というだけで譲ろうとしない。山下由美子も夫を立てているのか、特にファースト・ヴァイオリンが弾きたいといわないので、そのままになっている。

チェロのわたしの名前は日野正之。年令は六十半ば、チェロは学生時代から始めて、以後アマチュアのオーケストラ畑を歩いてきた。自分でいうのもなんだが、まあなんとか無難に音楽のベースを支える役目を果たしているといえるだろう。しかし、速い

動きは得意ではなく、そういう箇所ではしばしば合奏全体をゴタゴタと濁している。特に決めたわけではないが、わたしはこの楽団の代表のつもりでいる。みなもそれを容認している。

さて、四人の準備が整うと、一瞬静寂が部屋の中を支配した。こんなアマチュア楽団の練習でも、音楽が始まる瞬間の緊張は、演奏会での名人たちと同

じである。しかもこの日は、数時間後に本番を控えている。それだけでなく、三十分ほどの舞台練習も割り当てられている。そこでは参加しているほかの団体の人たちも聞いていたりするので、本番に似た緊張がある。

山下健がこの曲独特の、何拍目から始まったのかわからないさざなみのような音形を弾き始める。すぐに山下由美子も六度低く、やはりさざなみの音形

で続く。これも楽譜を見ていない聞き手には二人がどのような関連で入ってきたのかわからない。続いてわたしがはっきりとした前打音付きの長いファ音で入り、ここでリズムもへ長調の調性も明確になる。三人ともピアノシモである。わたしが低いファ音を一小節伸ばしたところで、この曲の第一主題が歌われる。岡田淑子である。

この旋律はヴィオラがもつとも魅力的に響く音域

で書かれており、ヴィオラ奏者なら知らないものはない。この旋律はありがたいことにアマチュアにとつても特に難しいものではない。明朗だがどこか懐かしさがあり、弾むようなリズムを持ちながら伸びやかさのある名旋律である。もちろん岡田淑子もこの旋律が弾けることはこの上ない喜びである。できることならお膳立てしながら出を待っていた三人の頬が、思わず緩むほど見事に弾きたいと思ってい

る。だが岡田淑子の願いにもかかわらず、いまはこの旋律の雰囲気を十分に表現しきれないまま四小節間の出番を終える。旋律が終わってファとラのさざなみの伴奏を弾きながら、岡田淑子は少し後悔の念に駆られる。本番ではきつとみなを、あつといわせでやろうと密かに思いながら。

そんな岡田淑子の気持ちなど関係なく山下健が、任せてくれ、とばかり短い前置きを弾いてから、岡

田淑子が弾いたのと同じ旋律を今度は二オクターブ高い音域で歌い始める。颯爽と弾く山下健の旋律には勢いがあるが、やや無神経な大きさだ。これではこの旋律が内包している柔らかい雰囲気ほとんど感じられない。それには音域の高さも関係していて、山下健の弾きかたばかりを責めるわけにも行かない。楽器の使い方が上手いドヴォルジャークは、そのことを知っていて最初にヴィオラで弾かせることにし

たのだ。

わたしは岡田淑子が主題を弾いている間は低いファの音を伸ばしていたが、山下健が主題を引き継ぐと、こんどはピツツイカートで伴奏を始める。これは半拍ずれた、いわゆる後打ちで入るので、ずれていくように聞こえるが、主題の後半から正規のリズムに移っていき、同時に全員のクレッシェンドで音楽は次の段階にすすむ。この間、セカンド・ヴァイ

オリンの山下由美子は延々とラとファのさざなみを続けている。しかし、こういうところで山下由美子は主題の流れに寄り添うように微妙な抑揚をつけ、また山下健のさざなみに、また岡田淑子がさざなみを始めるとそれにぴたりと合う音程をとるのである。そのために合奏全体が有機的に息づくし、響きも美しくなる。山下由美子は形の上では単調な伴奏をそれなりに楽しむ才能があるのだ。

山下健が元気よく主題を歌いきると、全員がクレッシェンドして、まずわたしが十六分音符と付点リズムの組み合わせさせた主題の最後の部分の音形を強くリズムカルに弾く。短くすばしこい音形である。広っぱで遊んでいる子供たちが、小さな土のこぶを駆け上がっては向こう側に飛び降りるような感じである。わたしが駆け上がると、後半の飛び降りる部分を待たずに山下由美子がわたしより高い音域で駆け

け上がる。山下健も山下由美子を追いかけるように続く。つまり十六分音符が、一拍目はわたし、二拍目は山下由美子、三拍目は山下健が、そして四拍目は同じく十六分音符だが少し収まる形で岡田淑子が弾く。低い音から高い音へ、素早く軽快に受け継がれる。これは聞くものにも、弾くものにも小気味よいところである。この部分は、これまでずいぶん練習した。連続的な速い動きを、一人が続けて弾くの

ではなく、四人が受け継いで淀みなく見せるのはみやすくないが、敢えて四人でやるところが面白いのである。シンクロナイズト・スイミングなどで見られるような、人から人に渡っていく連続技は見ていて実に痛快である。音楽でも同じなのだが、やるほうは大変で、間髪を入れないお互いの間合いも勿論だが、聞く人たちに小気味よさを味わってもらうためには、それぞれが弾く十六分音符の粒が揃い、テ

ンポ感も一致する必要がある。こういうところを練習して、結果的に上手く出来るようになるのはわが楽団ではヴァイオリンの二人である。ヴァイオラとチェロは何回やっても今ひとつである。四人ともが上手くやってはじめて面白味の出るところだけに残念である。もちろんこれは腕前の違いなのだが、ヴァイオラ、とりわけチェロのように音域の低い楽器は、音の立ち上がりが鈍くなりがちなこととも関係する。

正確には、

「音の低い楽器を弾く素人の場合は」

というべきだろうが。わたしはそのことを自認しているので、この部分を個人的にもかなり練習してきたのだが、やはりヴァイオリンの二人のレベルには届かない。

しかし、このことにあまりこだわっていると先に進めなくなる。うまく弾きこなしたヴァイオリンの

二人も、わたしたち二人を責めたりはしない。上手くいかないことで一番悔しい思いをしているのは本人たちであることをわかっているからだ。

これから先この楽団が続く限り、あるいはわれわれが楽器を弾きつづける限り、こつこつと地道な基礎的練習によつてしかこの差を埋めることは出来ないのである。たとえ練習を続けたとしても、いつの日か何らかの理由で楽器を置く日が来るだろうが、

そのときまでにできるようになるかどうかはわからない。

演奏はそのような多少のデコボコを乗り越えながらすすむ。まもなく長い音と短い音の組み合わせがつた一小節の旋律を、チェロ、ヴァイオラ、セカンド・ヴァイオリンの順に、一オクターブずつ音を高めて弾くところがある。四小節目のファースト・ヴァイオリンは同じリズムで、少しだけ語尾を違えて次の新

しい展開に備える。ここは、一人ずつ舞台の前に出て台詞をいうような場面である。わたしはここのとこるも上手く弾けない。音の並びの関係で難しいのだ。その一小節だけなら何とか出来ることもあるのだが、その前から続けると出来ない。わたしはこれまでの練習でも、ここを通ったあとついで顔をしかめたり、時には、

「あーあ」

と声を出してしまったりする。悔しいのだ。本番で成功する確率はさらに低いといわざるを得ない。わたしはこの日合わせ練習がすんだあとも、この部分を練習した。

わたしの悔しさとはお構いなしに音楽は進む。本番の直前練習では、個々の部分よりもまずは、途中で止まってしまったりせずにおしまいまで行くことが大切である。誰かが間違っても、その人が自力で

本流に復帰することを期待しながら先に進むのである。

複数のパートで速い動きを合わせるところは、ずれてしまわないまでも、ピタツと合っていないため、プロの演奏のような歯切れよさが出ない。そのような箇所が素人にとって難しいのは当たり前で、ぴったり合わないのは我慢せざるを得ないとしても、そのフレーズの最初の出や終りの音くらいは、わたし

たちでも気をつければ合わせられないことはない。
その

「気をつければ」

がしばしばおろそかになる。勢いに任せて弾く傾向のある山下健は、しばしば

「気をつければ」

をおろそかにするとわたしは思っている。わたしは、ときどきそれを彼に指摘する。しかし、そんなとき

山下健は、音の立ち上がりが鈍いために遅れて聞こえることの多いわたしに文句をいわれるのは気に入らないらしい。

「日野さん遅れるよ」

「いや、山下さんが一拍目に入るのがほんのちよつと速いんですよ」

という二人のいい合いは毎回のようには繰り返される。二人の議論は、多くの場合双方の技術に問題がある。

しかしこういういった議論がややこうしいのは、音楽において、メトロノーム通りに正確無比に弾くのが常に正しいとはいえないところにある。この曲のような情緒たつぷりの十九世紀なかばの音楽は勿論のこと、古典派のハイドンやモーツァルトの音楽ににおいても、テンポは前向きに進んだり、落ち着いていったりの繰り返えしである。人の呼吸のようによつて音楽は生

きてくる。ニュアンス付けをどの程度するかは、その部分の音楽が求めているものと演奏者のセンスで決まる。従って、ある音の出が早いか遅いかは、そういういったニュアンスのつけかた、歌い方の問題を踏まえ、たうえで議論しないと答えは出てこない。もちろんその前に、技術的な未熟さのために思い通りのタイミングで発音できないところもある。だからアマチュアはしばしばこれをメトロノームに解決して

もらおうとするが、わたしはそのやり方を好まない。演奏技術の上では不完全なわたしたちでも、音楽を感じる心とか耳という点では、

「聞く方ではプロ」

を自認している。幼稚園児や小学生のような演奏で妥協したくない。だから難しいのである。思うような微妙なニュアンスを自由自在に付けられないことはわかっていても、それでは満足できないのである。

ないものねだりともいえる。だからとりあえずは、メトロノーム先生に服従しよう、という気持ちになりかけるが、わが『カルテット・ヨハネス』は実りがあるうがなかるうが、そのような議論を回避しない。さて音楽は、この曲の極め付きの第二主題に近づいてきた。全員によるリズムカルなフレーズが十二小節も続いたあと、わたし以外の三人はゆったりした動きで徐々に静まっていくな。その区間は八小節あ

るが、まずフォルテイッシモから四小節かけてピアノにいたる。その間わたしは音量こそ小さくなつていくが、相変わらず名残惜しげにリズムミカルな音形を続ける。そして山下由美子が半拍ずらしたシンコペーションでダイクレッシェンドする。ここの部分の主な旋律は山下健が弾いているのだが、山下由美子のフォルテイッシモからピアノまでダイクレッシェンドしていく見事なシンコペーションの効果は、

音としてはミ音を繰り返すだけなのだが、これに気づいた者には、旋律よりも印象に残るほどである。

第二主題を準備する残りの四小節は、わたしも合流して四パートともゆったりした動きになり、音量もさらにピアノ三つ、つまりピアノニツシシモまで静まっていくな。第二主題の直前の半小節には

「ゆっくりする」

という指定がある。ここでは主にセカンド・ヴァイ

オリンの山下由美子とヴァイオラの岡田淑子が第二主題の雰囲気を与感させるような旋律を、気持ち合わせて弾く。テンポを緩めていく二人の動きがぴつたりシンクロすると、演奏者はもちろん、聞いている者も第二主題の世界にいざなわれる。そして弾いている本人たちは、こころいうときゾクゾクツとする。

この四小節で転調をして、第二主題はイ長調で歌われる。セカンド・ヴァイオリン以下の三人が静かに

和音を鳴らしている中を、ファースト・ヴァイオリンの山下健が持てる最高の歌心で弾き始める。この主題は、優しさと懐かしさの気分を喚起させてくれる音楽として最高のもののひとつである。これも正確にいうと、

「一流の演奏で聞くと」ということになるのだが、山下健の弾くこの部分も悪くない。作曲家の指示は、その前で

「リタルダンド」

するとなっていて、第二主題が始まるところには
「イン・テンポ・ピアノツシモ」
とある。

「イン・テンポ」

は音楽用語辞典によると、

「テンポを揺らさずに」

という意味であるが、ドヴォルジャークはこの曲で

は、どうも

「ア・テンポ（元の速さで）」

の意味に使っているようだ。作曲家によつて指示記号の使い方には癖があり、ここではドヴォルジャークの使い方を飲み込んでおく必要がある。しかし≪アメリカ≫のこの部分では、多くのプロ楽団がいま解説した用語のどちらの意味とも違った風に演奏している。山下健もそれらの例にならつて、この旋律を

相当ゆっくりと歌わせる。三人が最弱音で鳴らす和音に乗って、ただ一人たっぷりと歌うのは最高に気持ちがいい。

では和音を鳴らすだけの三人が単なる背景役で、山下健よりつまらないかというとなんかそうじゃない。音程がよく合ってハーモニーが出来るよこれはこれで、

「これぞ音楽する喜び」

というほどの快感がある。ただし三人ともに重音で弾くところが、あり、ぴったりとしたハーモニーを響かせるのはみやすくない。それでも何回もしつかり聞き合いながら注意深く練習すると、少しずつ本物の響きに近づいていく。こういう場合、音程だけでなく、三人の音量のバランスも重要である。一度上手くいけば次も大丈夫かという、アマチュアの場合常に当たるも八卦的な要素が残る。しかし、練習

はその当たりの確率をほんの少しずつではあつても改善することは間違いない。上手くいくとわたしたちは

「ハモツた」

といつて喜ぶ。もちろん響かせている最中は、露が虹色に光るのを見るときのように、息を殺して折角作ったその響きを壊さないようにする。

「いまのよかつたね」

と顔を見合わせて音楽する喜びを確かめあうのは一段落弾きおわってからである。そういうとき、山下健がうまく歌ってくれればくれるほど、みんなの幸せ感は大きくなる。

みなが第二主題の余韻をたしかめながら、冒頭からここまでのいわゆる提示部と呼ばれる部分を締めくくるフレーズにはいっていく。提示部の最後は、山下健が非常にテンポを落としながらヴァイオリン

としては最低音に近いラ音に落ち着くと、山下由美子が同じラ音から元のテンポに戻して、第一主題の旋律の前半部分を二小節だけ弾く。ここでの山下由美子の第一主題の断片は、最初のヴィオラの出と同じくらい特別に印象的である。こういうひと声こそ、特にアマチュアにとつては貴重な瞬間なのである。旋律を受け持つことの多いファースト・ヴァイオリンのパートなどは、よほどの腕と音楽性がないと、

一応楽譜に書いてあることが弾けていても、始終聞かされていると特に美しくも、楽しくも、印象的でもないと感じられてしまう。もちろん、世界の一流弦楽四重奏団のファースト・ヴァイオリンは、めちやくちや上手い。めちやくちや音楽的である。だから聞くものを最初から最後までひきつけることが出来る。アマチュアでは、少々腕自慢のファースト・ヴァイオリンでもそうは行かない。だから、この場

所のセカンド・ヴァイオリンのようにほんの二小節間に命をかけることのほうが、聞くものに印象付ける可能性があるといえるのである。山下由美子はそれが出来る力を持っている。それを聞いたヴァイオラの岡田淑子は、そのすぐあとにも、さらに展開部がすんで再現部の初めでも、お膳立てされた中でひとりスポットライトを浴びるように主題を弾くこととなるが、山下由美子に負けないうように弾きたいとい

う気持ちが強まるところである。その気持ちが、いざその場が来たときに、変な気負いや緊張につながらなければいいのだが。

《アメリカ》の第一楽章は、やっとその三分の一を終えたところである。このあとさらに岡田淑子が悪戦苦闘しなければならぬところ、山下由美子が颯爽と舞台の中央に飛び出すようなところ、わたしがチェロの魅力をここぞとばかり歌って聞かせる、い

や歌って聞かせたいと思うところなどが続く。

この曲の第二楽章はゆっくりとした魅力的な歌の楽章で、みんなこれを弾くのを楽しみにしている。速い第三楽章は、いつも誰かが出そこなうというリズム的に危険な楽章である。そして、最後の第四楽章は、ヴァイオリンのために書かれた最良の旋律が出てくる。それは、澁刺として喜ばしいが懐かしさ

に満ちていて、見事に歌われるのを聞くとおもわず笑顔がこぼれる。

この曲は、四人とも何度も経験しているが、いつ弾いても音楽する喜びを感じさせてくれる。

《アメリカ》は素晴らしく演奏する一流の演奏家だけだけでなく、アマチュア奏者たちにとっても、ドヴォルジャークからの最高の贈り物である。

一時間半くらい練習したところで休憩になった。

岡田淑子がポットに入れてきたコーヒーをみんなで啜りながら、この発表会がすんだら、こんどは何を練習するか話し合った。この選曲の時間がまた楽しい。実際に楽譜を前にすると、練習しても練習しても思うように弾けないので、苦痛も少くない。また練習を重ねると、それなりの成果もありはするが、大きな限界も見えてくる。さらに百回練習したら素

晴らしく弾けるようになるかというのと、そうはならないということも厳然とした事実である。だから時には、音楽が色あせて見えることもある。先の見えたことに時間と労力をかけるより、旅行でもしたほうがましだと思ふこともある。

ところが、名演奏家たちの弾くこの曲あの曲を思い浮かべて、選ぶ作業では、必ずやってくる苦しみのことは、みんな忘れたように、少しくらい、とい

うよりかなり難しい曲も平気で俎上に上がる。そして今度こそ難関を乗り越えるぞと気力を湧かせるのである。そんな時みんなの頭の中では、軽快なところを弾ききったときの小気味よさと達成感、和音を見事にハモらせた時のとろけるような快感、そして甘味な、崇高な、荘重な、輝かしいあるいは悲痛な、さまざまな感情の表現を求められる旋律たちを歌えたときの満足感を夢見ながら、しかもそれが出来そ

うな気がしながら新たな山登りをもくろむのである。

そのまえに今日の本番が待っている。しかし、何があっても

「咽喉もと過ぎれば熱さを忘れる」

ことが出来る。忘れられるから、次への挑戦の気力が湧いてくる。わたしたちの音楽のある生活はこうしてこの先も続くだろう。

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

完

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 07

音楽のある生活

2022年11月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID: 105365

・タイトル：譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
